

建 白 書 (抜粋)

藤本敏夫

■ 時代と国民が期待する農林水産省の役割

農林水産省、および農林水産大臣が国民に正面から語らねばならぬことを不遜ながら短くまとめれば、以下のように言えるのではないのでしょうか。

「“健康と環境”を保全する”持続と循環”の仕組みを持った農業と地域社会を創り上げ、”公開と公正”に基づく国民的合意の中で、日本及日本人の”自給と自立”を達成すること”さらにもう少し具体的に私見を色濃く交えて提案させていただければ、つぎのように言えるでしょう。

「プロの農家の「エコファーマー」としての再構成と、国民・市民の「ウェルネスファーマー」としての登場を通じて、21世紀型地域社会「持続循環型田園都市」と21世紀型生活スタイル「里山往還型半農生活」を創造すること」「農業」を中核に据えた日本の地域社会づくりと「農的生活」をベースにした、日本人の生活設計が農林水産省の目指すべき目的・目標だといえましょう。

今こそ21世紀の希望を行政目標として、そして個別政策として語る必要があるのだと確信するものです。

■ 健康・教育・環境・レジャーに対応する農業の多様な価値を担う「ウェルネスファーマー」

「ウェルネスファーマー」という言葉は、農民でなかった人が新規に就職したり、他に定職を持ちながら農業にも携わる兼業農家を目的に志したり、まったく趣味として農的生活を楽しむ人を目指してつくられた造語です。

専業農家の急速な減少と高齢化により担い手を失いつつある日本農業にとって、就農希望者を広くリクルートする環境整備はとても大切です。

そのためには一直線に生産農家となるための手立て、方法の国民的な提示も必要ですが、「自然に親しみたい」「農作業を楽しみたい」という農的生活への興味と関心を多種多様に汲み上げプロ農家を支える広い裾野をつくることも考えねばなりません。

「ウェルネスファーマー」は子どもたちの生命教育、家族の健康など生活者の直面する問題解決のために国民生活の中に農的世界を導入して、「健康」と「環境」を保全するライフスタイルであるといえます。したがって農林水産省としては、日本国民全員が何らかのかたちで「ウェルネスファーマー」となるように提唱してゆかなければなりません。

■

国民的規模での「ワークシェアリング」に貢献する「ウェルネスファーマー」

21 世紀の希望を語る世論形成の土俵づくりを、農林水産省が「正面きって」提案することが時代そのものから要請されています。

農林水産省の「正面きっての提案」の一つは現在、合理化・リストラの大波を受ける労働界で論議されている「ワークシェアリング」に対する受け皿としての「ウェルネスファーマー」の役割です。

趣味の園芸からプロの農家までの幅で国民・市民と農業との関係を取り結ぶ機会を提供する「ウェルネスファーマー」を「もうひとつの労働」「もうひとつの社会参加」と位置づければ、会社を離れざるを得ない立場の社員との協力関係を組織的に明確にした「ワークシェア」としての「ウェルネスファーマー」を具体的に構想することができます。

5名から10名の「ウェルネスファーマー」のチームが里山里地に定住・半定住・往還（言ったり来たり）し、地元生産農家の指導を得て、元同僚の社員がサポーターとして購入する。

そのような小さな動きでも日本国民のある程度の人々が参画すれば「生活農業化運動」「国民皆農運動」となって、21世紀ライフスタイルをつくり出すに違いありません。

※この建白書は 2002 年、当時の農林水産大臣に提出した文書です。

藤本敏夫略歴

68年反帝全学連委員長。72年から3年余り、学生運動をリードした責任を問われ、服役。72年、加藤登紀子と獄中結婚。76年、大地を守る会を始める。農事組合法人「鴨川自然王国」代表。2002年7月、没。

経歴

1944年・1月23日、兵庫県西宮市甲子園に生まれる。

1963年・同志社大学入学。新聞記者を志して新聞学を専攻。

1964年・大学二年、学生運動に参加。

1965年・京都府学連書記長に選出。

1967年・羽田闘争参加、これを機として明治大学を拠点に活動（同志社大には在学）。

1968年・7月、反帝全学連の委員長に就任。藤本はブント系の社学同所属だった。10月21日・国際反戦デー防衛庁抗議行動に参加。11月7日・上記参加を理由に逮捕。1969年6月まで勾留。

1969年・内ゲバ激化に反論、学生運動から離脱。この間、長崎県平戸に滞在し、地球と

人間の問題を考察する。

1970年 - 日本キューバ文化交流研究所事務局長に就任。

1972年 - 4月21日、学生運動関連（公務執行妨害・凶器準備集合罪など）で実刑判決を受け、中野刑務所に収監。5月6日 - 歌手・加藤登紀子と獄中結婚。12月7日 - 長女・美亜子誕生、名前は藤本の命名による「美しい亜細亜の子」から。

1974年 - 栃木県黒羽刑務所から出所。

1975年 - 12月14日、次女・八恵（現在、歌手のYae）誕生。

1976年 - 大地を守る会を藤田和芳と共に設立、初代会長に就任。農業の理想を追求し、自ら実践するため、有機農業の普及に関わる。

1981年 - 千葉県鴨川市嶺岡山中に移住。農事組合法人自然生態農場「鴨川自然王国」を設立し、主催。

1992年 - 参議院選挙比例区に、環境政党「希望」を結党し立候補するが、落選。「希望」はみどりといのちのネットワーク、原発いらない人びと、ちきゅうクラブを糾合した組織。選挙後、野村秋介らとともに、少数派・諸派の立候補者を排除するマスコミの選挙報道を公職選挙法違反として刑事告訴した。民事裁判も起こしたがいずれも認められなかった。

1999年 - 農林水産省関東農政局の諮問委員に就任。持続循環型農業の普及方法を提言する。

1999年から2000年 「土に生きる」トーク&ライブを全国12カ所で開催（加藤登紀子・Yaeと共に）。

2000年 - 8月、株式会社ナチュラルコミュニケーションズを設立、代表取締役役に就任。

2002年 - 7月31日、肝臓ガンのため永眠。（享年58）

主な著作 [編集]

農的幸福論—藤本敏夫からの遺言

全共闘30年—時代に反逆した者たちの証言

藤本敏夫の糖尿病変革論—愛する糖尿者に贈る

不健康長寿国ニッポン（西丸震哉との共著）

希望宣言—日本の「風と土」をとりもどす「無農薬政治」への道

人は昔魚だった

藤本敏夫（ふじもととしお）

[日本大百科全書（小学館）] .

(1944—2002)

1960年代の学生運動活動家。兵庫県西宮市生まれ。1963年（昭和38）同志社大学文学部新聞学科入学、鶴見俊輔のゼミで新聞学を専攻。同大の新聞学研究会の学習会でエンゲルスの『空想から科学へ』を読み、これが彼にとっては「決定的といってもよい選択」となった。大学2年生のとき学生運動に参加し、「今までとりとめもなくバラバラに頭に入っていた一つ一つの出来事がすべて体系だった相互関連の中で理解できる」ことに感激する。

1965年京都府学連書記長に選出される。67年「10・8佐藤（栄作、当時首相）訪米阻止」闘争を契機に上京。翌68年、三派系（革共同中核派、反帝学生評議会＝反帝学評、社会主義学生同盟＝社学同の三派が指導する）全学連委員長となる。同年10・21国際反戦デーの防衛庁突入行動等により逮捕される。こうした一連の行動について後に「1968年を象徴とするその年代後半の学生運動は、時代そのものがやりきれない思いを噴出させたものであって、言ってみれば近代社会の深呼吸であった」と中断した自伝（『僕の生涯』（2003））で述懐している。

1968年出所後、反帝学評の本部のあった東京医科歯科大学事務所が、社学同の反対派活動家によって無惨に破壊された状況を見て呆然とする。仲間との敵対関係と組織内暴力に絶望した藤本は、69年学生運動から離脱。その後長崎県平戸に移り「地球と人間の問題」について考察する。72年日本キューバ文化交流所事務局長に就任。同年、69年のアジア太平洋協議会（ASPAC）第4回閣僚会議開催に反対して御茶ノ水駅周辺で行った「神田カルチエ・ラタン闘争」（パリの学生街カルチエ・ラタンは、当時、フランスの学生運動の最大拠点であった）を指揮したことに対して懲役3年8か月の実刑判決を受け、東京・中野刑務所に収監される。獄中で連合赤軍事件を知り、「よく知っている奴が殺された方にも殺した方にもいて、自分の体から生き血を太い注射器で抜かれるような」絶望的気分を襲われた。

監獄生活中に歌手加藤登紀子（1943— ）と結婚。その後「農業」を志望して栃木県黒羽（くろばね）刑務所に服役、「構内清掃衛生夫土工」をしながら、出所するまで園芸の仕事に従事。その間に「食」への思いの強さと、その元になる「農」との結合に強い興味と関心をもつ。1974年出所。76年医師高倉熙景（ひろかげ）（1917—84）の提言する「医農学」に共感し、藤田和芳（かずよし）（1947— ）らと有機農業の育成・普及を促す「大地を守る会」を立ち上げ、会長に就任。翌77年、有機農産物および無添加食品を販売し、有機農業を「普及・促進」するために、ボランティア活動ではなく、出資をつのり、利益を農業開発に投資するとともに株主に分配する「株式会社大地」を設立、代表取締役就任。81年千葉県鴨川市に移住、21戸の農家を組織して農事組合法人「鴨川自然王国」を設立、代表理事に就任。農業と都市住民とを結びつけるネットワーク型組織による「百姓親類付き合

い」を旨とする。このネットワーク組織作りの動機は、かつて大学で鶴見の薫陶を受けた藤本が、団結による組織論に依拠して革命を目指すレーニン型党組織論に違和感をもち、「共同体」志向を強めたことにある。83年、日本における有機農業運動のリーダーであった有機農業研究会の一楽（いちらく）照雄（1906—94）から株式会社大地の設立に対して、「農産物を、商品と呼ぶ」ことを厳しく批判されたのを理由に、株式会社大地および大地を守る会の代表を辞任。85年、環境と農業との結合を旨とするネフコ（Natural Ecological Farm Co.）を設立。

1992年（平成4）政党「希望」を立ち上げて参議院選挙比例代表に立候補し、落選。97年農産物を環境・安全性・味の観点から総合的に評価する株式会社農業食品監査システム（AFAS）を確立。99年農林水産省関東農政局諮問委員に就任、持続循環型農業の普及を提言。2000年全国の青年農業家、流通団体など1000人以上を集めて持続農業推進全国集会を開催。同年株式会社ナチュラル・コミュニケーションズを設立して、自ら開発した「自然王国」ブランド農産物による農村と都市との循環型ライフスタイルを提案。02年農業の復活と都市生活の活性化を図るため当時の農林水産大臣武部勤（たけべつとむ）（1941— ）に建白書（『農的幸福論』（2002）所収）を提出し、これが最後の社会的発言となった。同年7月肝臓癌で死去。そのほかの著書には『人間はこの時代に生きられるのか』（1972）、『人はむかし、魚だった』（1982）、『不健康長寿国日本』（1986。共著）、『やまもの樹に抱かれて』（1988）、『希望宣言』（1992）、『藤本敏夫の糖尿病変革論』（1995）、『現代有機農業心得』（1998）などがある。